



## 思いやり、優しさ

校長 今福 真和

2学期が始まりました。猛暑の夏はまだまだ続きます。よく睡眠をとるなどしっかり体調を整えて、こまめな給水など熱中症対策も自分で意識して行いながら、毎日元気に過ごしていきましょう。

夏休みの前半に、6年生と日光林間学園に行ってきました。現地ではほぼ午後は雷雨になり、初日の午後の日光東照宮見学は翌日に持ち越しになりました。それでも同行したツアーガイドさんにプログラムの組み換えをしていただき、予定のプログラムをすべて実施できました。子どもたちは予定の変更にもめげずに、どのプログラムも楽しさをもって活動していました。私の乗車したバスでは、ガイドさんの日光にまつわるお話をいただいている合間に、子どもたちが考えたレクリエーションを楽しみました。なかなか珍しいことは、帰りのバスではDVDを鑑賞していることが多いのですが、今回は帰りのバスの中でもずっと自分たちで考えたレクリエーションをみんなで楽しんでいました。一体感を感じて微笑ましく思いました。

3日間の行程のうち、出発式と帰校式では校長が話をしますが、開園式、朝会等では引率した教員がそれぞれの思いを話します。3日目の朝会担当の先生は「みんなの優しいところがたくさん見られて、とても嬉しい。」というお話をしました。教員が重たいクーラーケースを持っていると「持って行きます」や「手伝いましょうか」という声が子どもたちから掛かり、実行してくれたそうです。教員も子どもたちの何気ない優しい声掛けや行動が、とても嬉しく感じる時があります。元気をもらえます。大人はどうでしょう。前出のツアーガイドさんは打合せの際に、子どもたちが様々な体験ができるような提案を熱心にしてくれました。仕事とはいえ優しさを感じます。教員が運んでいたクーラーケースには、凍らした水のペットボトルが入っています。飲料水が無くなってしまった子どもたちの予備として、教員が何本かずつ分担して持ち歩きます。暑さ対策として当然かもしれません、それでも子どもたちを思う優しさが根底にあるのだと思います。

学校生活では本当にいろいろな場面で優しさが見られます。1年生が大切に育てているアサガオが風の強い日に倒れていきました。「僕のじゃないけど、かわいそうだから」とアサガオの鉢を起こしてあげる1年生がいました。さも当たり前のように無言でいくつもの鉢を起こしている高学年の子や教職員の姿も見ました。校門であいさつをしていると、泣きながら登校してくる子がいます。「大丈夫」「一緒に行ってあげようか」と声を掛ける友達や上級生がいます。校庭遊びの最中に転んでけがをしてしまった児童の手をとり保健室に向かうと、何人もの子どもたちから「大丈夫」と声がかかります。一緒に歩いて保健室のドアを開けてくれる子がいます。みんな自然と相手を思う気持ちや優しさから出る行動です。探鳥会や地域巡りに同行して見守りもしてくださる保護者の皆様。本を選んで気持ちを込めて読み聞かせてくださる図書ボランティアの皆様。子どもたちの登下校を見守る地域の方々。子どもたちを思う優しさを強く感じます。

2学期も「だいじょうぶ」「手伝いましょうか」「元気出してね」など、優しい気遣いや言葉かけがたくさん見られる学校生活にしていきましょう。